源楊春葉奇源十

武
190
10

へ13
190
10

東京大学
史料編纂所

令
190
10

絲櫻春蝶奇縁卷之十

東都　曲亭馬琴　編述

第十四段の下

當下十郎が声を細め。無慈悲なるその夜さり人を殺せし癖者はあひもかはらぬ檀那刀祢。つまいとものあるとの人のありやせんと挑燈を滅して口をそそ石い明々地ゆく所在なる訪ぎ。又被狭七が倆五郎どの書遣しる旅ゝ。とのひゝ殺と無跡。一封の書簡をもう出て。さやくとゆり披き。芳恩謝すふ辞なし。然と以上。夜の起ふ入りまふあり。爭で貴兄を殺すべき。人を殺せし罪人なりと自訴せんとやらのゝ。彼ふい吾倆るに法ふ彼一物をもり復して。夙志を果ども文ゝ。と書さゞる。自筆の状現せめそりのことふて。さりとそも狭七を死しく阿容ゝと。存命んとやふ伉俠ゆあらぎとの送書い彼人の袖ゝう送しるひけん。

ひきとりしと聞えしが拾ひしかバ。狭七ハ遂に疑れかゝり。忽地搦捕られん二人に一人環會て。
貞の疑ひを問定め。そのくさびにて十三郎が身ひとつをのがれ此彼を救ひんものと思へども
姉がすゝめもあり。窃に行方を索ねまはるに一人ハ在所へあれバ巷の風聞つよく
危く。一人ハ早く遺書の疑ひに似ぞ小糸を招て純くもとに隠まさり人の誠ハ人の為に。
ふさがる一命は隕まで。かぞへ切り誠いふれのを人を殺せし罪犯を身に負んなどの筆
ゆも知ざる虚誓文かくのごとき白物を白物とハ知らずして家名を続し剃刀に依て
大かたならぬ罪を遁し綱五郎どのこの為に偉を作へも吾らが悔しく面おさん腹も立ん。
いよいよわらべ狭七を寄居隠しようとてかくさんやと引摺出して目に物みせんと寄るあたりを
席を指するさを体とりんかくてさバ狭七も今の恐ろしさまで蒲團を亍と推揚て出んとする
あとを紛ども阿徳ハ夫の楯にありて忙しく十五郎を推禁めつと泣きがら縫ひし
彼人に。わよも面るにも貞るがらいかゞせひとつあて増を重し瓢を亡に推も倒すと世の

人に。のこさまへんハころゆゑぞ科戸の風のおさまらバ。うちも騒ぎしさら波立かへる浦にいま
下さびおふぎの譯を問んのこされバとて又今更にことまあがめハ世に花でうちも殺して
これ夫とて着まゝらんといふとも横ざまに咲れるバ為伴秘しく侍るし。よしや産声
の神謀めて。舊の夫婦にあるようあるとも。盲目にあらバ彼方より。いよまうく蹂まえ。
闇より闇に迷ハさまかくて歎をかさ祢んより。憂をみるめとみえぬ目に操ハかえぬ磯
の松浪の底なる親の為。あまりにあらんと縁てより。思ひしる残果して呂瀬りけれハ
狭七ぬし小糸どのあるも共に招る随縁薄命。町へかへりあひなバ。ゆめ根こねひる愛
さ嬢は前忽地に言葉の露を結びかえまく娯しと思ひねひらん。いろ精しかくきびに
狭七の身に遭して又あへりまへと口説ぬる涙に余所の降ぬ夜の雨に脆き心を砕まし。
小糸いつぞ涌かへる千形の涙堪あへぞ。ゆうめくに頭を擡人のうらみも夫婦が落命が嶽
まで今更に湛ぬ恨をいひあてよりいはけまでも。恩を受る嫉球丸の生死の際を

外ふし。仇し。公の迷ひより。逃かまつとといふるゝ。公の後も打をく。歎きいとゝ十すはん。
とゞる。公良人いある比如此。このゆゑ。主君の為ふ誠を尽ぜ。竊ふ友を去るゝ。
その日ひるふゝその人ふ伴まても脱まね因縁。宿のゆゑ有ゑ。今ゑ二月ふ。
佐りかくて野をるゞゆまと文字ふ假名川の病りて出て行徳とゝふ里へとて赴く往ふ。
因幡の林原すゝ追手ふ逼られ夫婦尾上を隔つ。命運共ふあ曳の山賊とゝふ山賊
の。寨へひくふを捕られ。死むべきをゆるゝ。蜘蛛丸ふ助られ。十兵衛ハ子を寓
ゝこの比良人ふ環會來ゝ。問ばゆひきゑ伝れぬ恩義ふ繋れて。糸屋の婿ふ。
ぬとゝふ妬ゝと。ゑゞ良人の怨恨をかして仇ゝ女子と婚縁の夜の酌ふ。毒を仰と。
ぬひゝん。この一條ゆゑ大ゝふ公操をも猜さるべ。かて夫ハその夜さうゝ歎さゝ新婦ふ前の
言の禁せゆゑ痛ゝ。つゝく。ゑひゆゞ世べ糸屋ゆ身をあ死ゝ。蜘蛛丸の罪ふ代て死んと
ゑひ決ゆゝ主人ゞ腰刀の室内へ送書てさ入ゝ。主ゝ出ゝ伝ゝ。ゝゞ。ゝゝふ夫の跡ふ追

辛くその夜の必死をとゞめて。且くゝふ潜ゝ佐まゞつゆく命を惜ふあゝゞ。主君のあふ
ゝ。ゝふんと。ゑひゝもの伝ゝも。ゝゝ早りて死んハ不忠なり。そのゆをも任ゝる。綱五郎ゝ
消息を。ゆ定めて後ふこと。墓ゝ公あて。ふ良人もゆゝゑひかゝて。形ゝ死瀬ま
ゝゞらの。礫川ゝの俤の宿浮世もけのゞ除波ゝ。今この差別を面ふ若ゆゝ
すゝゞ恨もゝゞ。ゝゞ所天ゝゞらゝ所天ゝゞ。狭七ゝ。ゝ持ゝ久。謀りゝふ新婦ふ前
ふ配ゝゝゞゝ所天ゝ。人の扶助ふ発跡。夙志を遂ゝゞ。熱ゝゝ身ゝゝ多ふ波風
騒ぐ生死の海とゆゝもゝゝ。ゝ父ゝゝ母ゝゝ人ゝ濱の真砂と尺ゝ歎きゝゞ後世の
障とゝゝん。南無阿弥陀佛と唱て。懐紙の間より刀子を抜とゝ。自殺せんとゝゝ。
ゞゝ立騒ぐ。旦那阿總を撥除る。十兵衛ハ忙ゝく小糸ふ小鞆を楚と拿り。抱き徜ゝ折
こゝあゝ狭七も自殺する妻をゝ。ゝふ堪ず蒲團を撥遣ゝ。ゝゝ團坐ふ出さゝゞ。
義て浮とゝ沼ゝゞ。旦那ハゝ旦ふ成ゝかゝゝ。ゝゝふ狭七どゝゝふ間ふ十兵衛ハ。

力をきゝ給ふ声をあげ。ゆゑ小糸ゆゑ所ゝ有理とハ云ひ乍ら仏なく置覓げて面目色。假初の情由でもなく。腹ゝ三月の子のあり女房夫を化小ゆゑまでいその夜直ふ死ん後。それもう悔も忍べるゆゑ。ちで死んとそふハ理色。喃狭七。狭七どの。公ゆゑわらぬ上ゑ。のゝいそれ〳〵さテそ腹も立けゆ。川漁の舟の遣ちゞひ。當て碎る今胥の始末この糸合ふ怪我もさせゞ十五歳が揖取て渡りをつくまゞ夜の中ふ漕戻ふといと易ー旦両いるゞそ狼狽る。阿徳勿注小糸も勿注まゞ小鞆をと豪奪ゆち返ーつ〻ゑんかう又て刀子ハ値前の家正小鞆ハ則赤銅鞆子に金の胡蝶を三附ゆ。とゆふに狭七も海ーげゆ。さ聖ゆ〻ゆ鷺紀夫ゑを去ゑ手の秋の比親と親とゞ相潭て小糸ゞ好と某ゑ婚縁を結せーゆ。ゆ物ふ疑ひ色。ゆゑ云号吾妹ゑハ底の水屑ふゆゆけゞ。ゆひゆめを見ひきゑいゆる夜阿徳が死人をーゆ。刀子が見るゆんとハ。ゆゑそゑまゑその夜さゆ。その刀子をゆゆる隨猛ゑ糸屋を脱ゑ去途ゆて小糸に領ケーゞゞけふまで小鞆とゆくもゆんゞゞ。ゆゆる

不ゆ殘も世ゑあれゞゞ。ゆゆゆるゆの旅とゆゞ解ぬその疑ひいゆふも伐ゆゞと爲ゆく阿徳ゞゞと爾ゆ。扇ゑ写せーゆ古歌一首旦角ハ彩燈ゆゆてゆゆせの海の玉ゆる浪ふ。さゆゆ貝ゞひゆ浦の春をゑゑゑゑて吟ゞれゞ阿徳ハ扇を推向て。狭七ハ俤の名狭五郎ゆ。當夜ゆん対ゞ卧房の中へ送ーゆひーゞゞゆゆふ写せー古歌ハつゆらゞ自筆とゆゆれてゆゆゆく疑ひ惑ゆ狭七小糸ハ小膝をゆゆ。原来ゆん対ハ去年の九月茶々めゆ共ゆふ海のそこゆゆゆも入水をと。板子ふゆゆ名をとゞゆる。吾妹子ゆゆや。妨れ赤狭と問ゑて阿徳ハ目を拭ひ。船の板子ふ亡親の書送ーゆひゆる。その水茎の跡紛てつふハも死ゆゆと云ひゆゆ。疑ーゆも理ゆゑゞ対ひゆゆハ危くも暴風ゑ吹流されゆゞれくて犯の浦ゆる。木嬰尼ふ助られ。今茲ふの夏四月の下浣尼ハ郷導せられ。縁会〳〵死てゑゞめて勿る。阿翁の横死。良人の逐電尼ハ家さへゑ世去ゆゞひてゆゆゞゆけまゞせめてその送言ふ伴ゆ。ゆ町の多公ゑ公ゆゆゑ。対ゑゆゆ

夏草と茂りて広き武蔵野の芝崎寺のほとりにて悪徒に謀られつゝ果てし
夫に逝れんとて舊里より齎しゝ羽織をその日失まし十兵衛ぬしに校まて木嬰
尼か由縁ある家へかゝる棚ほし小舟浅き縁とのひすつら云号ある刀祢にえもぞ。
推辞かなる婚姻のその夜死んとせしおふとふれし小鞘ハ良人の記念獲られ
扇いつぶか自筆舊へかへりつゝせしいおりて去ふる祥なりけん名告あふてれるかくふ。
面をあはせるはしるさふ目のかんえぬこそ幸なれ腹に三月の子あつと吹く妹を更て
妻して。この身ハ尼なるぶ娘や。児が柏のうらみもほしとれいひるすうらいひとく小。
いひ解がむ心ハ羽織の子も其是のこぞ面ぶせなる。物の報ひ欲過世の業欲世に落
命なる婦女子もつふかうへハかもあふしまあるべしやとかけ泣涙とともに咲あげ
声ハ曇まど曇るかる節操ハ貞女の鏡にこそと十兵衛且聞て嘆賞し。いよく
阿徳を憐めバ狭七ハ頻りに慚愧して額に流る汗を持代ずて死んと書遺せし。

筆の命毛の末に惜むに似たる再会ハいと面なさに隠し沼の底意を小糸に流
あるされ。ひろ妾くるゝ物から。阿徳が懺悔もこそと慰める程で又さらに身の罪を
飾るにあらねども云云のなありて已に夜物を藤金子を背棋といふ老女を殺し。
小糸も共にと刃を揚る。刃の下に名告りけし。素生を吹ば不憶云号する妻が妹と。
父の遺言に付節を合せし。奇耦に感じて殺さるに忍びで聴て小糸を携へて。
藤金を逐電し。謀て主君の仰を受る陣羽織を索んとて身をまかず秘る濡
衣を乾よしある心の愁に父が今般の言の葉を取うち守りてる微生な信小糸を
窃かに伴ひしハたち義にも似る不義淫奔とてよみやく身の非を知とべ百折千磨
の患苦を経ても志を移さざる阿徳が苦節に恥ざらんや。嗚呼怪しやあやまちな。
とワが非を責る罪障懺悔に小糸ハいよゝ泣流る和や姉の身へ世にあると人と聞
ろべぞが云号の刀祢なりとまりつかず添まで。水と金なる相性も。果ハ口舌の方外

吉乳姉の夫をつぐりの身よ。姉夫婦ひそ弦殘う。賢さちる羅犯ハ勸解ふ
言祭るの尺りの紙ょう中目ハこえのろどとも。ひくで面をあつさぐ。舞ーめ。
立て。のく青ゆるーた蟋蟀つぐりめ巴ふろう妻姉ハ妹よ疑ひのとけて悔ーた
両鬚。紀の浦を卯とたつ。つた女子の長旅ん途よ禍めーー巴ととて木嬰尼のまろ
えろふー。断ヒのひー黒髪の。結んとろふ結ま石。緑ーよこそとろふのミ。勸解ち
るくエヤハめんとのひ。慰る同胞ぶ仰る顔さ人ふーーとびて長ん。る。不ぬ
歎きのくぶくふ胸ふくまて乳ものが。」苦ふ苦と呼びつ。創まんとちろうーーんば。
十兵衛ハ衝とろて。小糸沢抱き紀とあぞ。旦開も慌忙て阿絵を抱き縮めつ。ろ
共よ噴活ま。ど行て疲ハせぶろう。當下鼓七ハ遽ーー小糸ぶ懐を掻捞り。彼印
籠をとろふ。つ。ごまをぶつ旦開ふ。素湯を茶碗よ汲ろて。神女湯を揮ふー。
小糸ぶ口中へ活ぎ入ろんば。旦開の赤遽ーく。寿恋丸を摂ろて。阿絵ぶ吻へたるち入

此彼斉一勳るみぞ。同胞ハ忽死。よ死定る墓剤の効驗。宣よ青ろり妙ろり。
と十兵衛旦開ハを殺べ。ある鈴ーや。おちみろう。世よ稀ろべき再会寿猛。阿絵
を小糸ぶ姉くとん。祈るふぶーて雅ろえちくん。練まあろる情由るれど。あ尺術人
とんでハな。進ま退ま姉妹。隻ろるく圓ま。成べきるぶ。と同胞ぶ。十兵衛旦開同胞
阿總小糸を慰ろる。旦開ハ件の印籠をとんめうんつ。彩燈の浸ろくりて眉を顰め
おのぶ腰ろる茄袋の口を開尺てとろふと。印籠の半截と。楚と含ろる親子の割符。
うち鷲尺て小膝を拍。櫻花ちくん」の高蒔絵。三重の印籠ハ遷備ぶ親の偽ん
ろり。舊夫よ寺ま一と尺。両個の女児よワくちとーせ。その一重を藏ろ小糸ハ乳と
止仏子と呼まるん。そぶ姉るんば同でもろる。阿絵ハ正ーく小草ふこそ。とハのふさそろと
姉妹。左よ右よ携ろ著。ろ宣べ。ん身こそ。ぶくぶ母公よ。ーまんるん迄世ろ
てゆく。ゆでよ。悉令落。身ハ釈の羞いひあふさ絵どぶくろ。ぶくろ。舊里のろ。

乳名さへ又人にハいはねど。面影懸らぬ母御前に。環あふべきよしもなかりける。印籠の
年頃胸の守袋とある其に。書残日ハなけれども其葉剤の徳なりしかバ。人を
見せぬ懐よりとり出されて婦女御前の危窮を救ひしこそあれ。母御の御手に觸たりし
その半截の一重ハ二人のもとにと。撰投て阿総が生ときく印籠をひとつにまとめる紀
同胞連る枝にさくらの躑躅原同根にかへり見て七重八重より憑たる三重の
盒子なるかれハせびと擁ける。女児ふたりを左右の手にかかえ抱き。ひしと引よせて涙に物を
いはれざる水の流に喩ふる人の往方ハかなしまざに。ありたるその称と千年歳ハ白真ぢ
かかる釣燈の燈花がけ起し。名をのこる姪ならひ今さらぞ見えし白いかながらふ父母
見せよとさし覗く血絡の親ハ千行の涙恩愛別離。喜怒哀楽人間萬事塞
翁が馬なるらんと繋がれて名乗るは舊の壻姑。枝七も只顧歎し。只ひたすらに
再会ハ次ちる三ちせりかへて同胞ハ拭へど絶ぬ涙の隙ま。年の今月

今日遠江灘をわたりし時。おふ浪に舟を覆されど。父東六が横死の事ハ。天龍のほとり
にて背撲に為引されて。謙介へ行て去るにて虎兜に人とかけしるが。身の夏憂とくれハ十
あまり二ツとせになるる物語こそ尽ぬ言の葉の露おげれ六の袖垣も。いづれ隔て
ぬ見物から。かくて阿総ハ母の面かげすら知らずといへども。病眼拭ふて身をそらさむ。花の
香かよふ風ならで。めぐる霞ぞ程ひける。旦兜ハ吹と吹毎に親をさいかしけれど子ともが貞
実身のなる実をもいはしらぬ強顔に武蔵野に今宵ぞ一紙死ところとおもひ
定めて目を拭ひ親の因果ハ子に報ふと喩に漏ぬ玉ならん。女児なりと産て
僅に六才の冬別れて後ハまたにめぐり逢ふ月の雲めぐりあふてなきく敷きも
いとゞ哀れ穂の芒かねたるに行れども。懺悔せんハいかなる罪いかなる科も滅すと
るや。いと秘しておきしかども。壻の刀禰も吹きにくく素心より吾儕ハ及ぶの。田面の
あく稲ども。越路に生まれて親の為花の落の柳の馬場。六條の妓院に賣れて

河水の瀬よろぼるの跡濁りする鶏鶩樓曙明と呼ぶ。全盛大々さうぶんべ。
あふ夜の嫖客ふ偽りの神をちかける彩雲をさのそのひけん社社果いろげれ
の杜とる。東國より年毎に商物の爲京のぼり一八とうふ嫖客へ綱五郎が
父ありて京洛の旅宿にあひ別れてより煩ひ管ふ系せーが世とする業の外ふーつ。
妻を去り子を忘れ。のぼり結る京洛の拉奥向九の債果ふりく眼ろく跡のるれ
まくふ吾儕も共ふと誘る。死鬼憑る嫖客のうそさんやるべうへあ移ども。
情ハあるじ虚与実浮るるも恩義ふ。弱り果て夜をとめそ。ありかぬをことと
冥土の旨途。妓院を閉じ生さうりる。比ハ九月十七日。月の都も矛の秋ふ。水鳥
さらぐ賀茂川原。水底へのろ共ふとそ郎ハ既ふ沈ろう。吾儕ひとうハえろうぶも。
伝弊へと陥る武士の浪人五十四歳東六郎とふ入ふ赦ふそ。その夜そぶ〳〵安濃の
津へ伴ふる再生の恩ふこの身をまとろ。一八ねの横死のる。教獲ハいろくどる。

ある人ふ人を徴伴ふ。夫婦ふりて次の年。うまれ女児ハ好ふて小草正ふ子とふ
こる。春の野山ふ挿ふの花又堂の中の珠。それ忘れ去年と暮一今
年と送りて年も迎る一八ねの七回る。骨のほろ異るる。ろうろく吾儕ハ
所以もるく。良人ふるく疑ふ。その年の冬紀つるもねろうの女児迎ふ。止ふ
子を属て去れば。往方定めぬ旅衣。ろうらふ〳〵くも舊里る。越路のほとを乞
あてふ渡ふ葉名の津ろう。悪掘ふ導せれ天龍河いろとろう。遠ふ止ふ〳〵を
奪れて。吾儕ふ爰ふ危きれ。伊勢ろう武義へ移りるふ。十五歳ふ祇ふ環会ろ
豊嶋の不町へ伴ふ。ひもゆけど武義徒一八ねの舊里る。その家ふーも無ふ
ければ。京洛と伊勢のうのハさろ曙明とふ名ふ匿ふ。ろくふるべもあれ因縁
一八ねの才る。十七歳刀称ふ。推辞ふ移るるろ今夜つま祇ろ。ふ仕ふ
三年。十ふ低とのハ忽地ふ黄泉の客とるりるる。綱五郎ふ

護言糸屋の後家と呼れつゝ、かゝる身の為に世果報合の花ある子どもゝ
いろふありけんなかりしとそふかあらいへどえよりの孫がいとで胸ふのまさえぬ歎ふ
年長て環会ふるその女児ハ面なりしてそれとも知るよしなく、玄号せし土八乃
誠を尽さむと長女ふいつく迫りて物をおもい、淫奔なるね次女揚月乃衲さんも罵
めて賢態る面なきよ現報ぞもとらとぞ因果ハ琥珀の塵の世を厭て出家し
阿弐とあらその法名ハ木嬰尼一八ぬし、ふ棄られし。縁故ハ吾儕ふあらそとの尼にハ
庇を受る阿總からへをいへたさらく。吾儕ふ崇る一八ぬしのそが一子なる綱五郎ふ
憑まれも故まて聟刀祢小糸ゆゑ共よ親子同胞外又よ姪ひとつ席よ聚合ぎ
おもひどおもふれどさまぐふ思ひ屈らなど、ひ苦しまさるやるもあるぞ煩悩の犬と猿なる一家
の口舌眉ひそ閉きて笑ふ日の一下日もなきハ冤魂の祟も執念深き貪縁けん
されバこそあれ子どもらハ心操さへ慓致ぞく人なるよく勝まても。幼稚よりも幸

なくて照る日の下ふありながら、悪まれし雨の花漁村の柳刀、迎られバ遠津淡海の
灘る丹碑まで水底の底の水屑となりつひし。東六ぬしのあやしぬ終焉
そを待ちおして自殺せし。矢所平ぬしの殺さゝれ変けがおもへバ冤鬼の祟まの
柳筥や。その殃危を賀茂河のながれのもとぞへ安濃の宿庭の貧ハ清けれ
ども身ハ濁江の雌雄松千年の後追なりける。東六ぬしとさし対ひ酒酌交
せし盃の、さかも深くく秋の夜よ過来しもその物語せし。この頃よりぞ物の怪の
祟ゆゑよりて崇るなど。業名の津天龍河七十五里ときこえゆる灘も月日も遠江
一八ぬしの十七回忌よ水泡となりし舊夫のげふハ正しく一周忌服れぬ吾儕も
終の友後まで死出の山の道に、かまあれど心ろし川とのよ字のありて海かも
いと深き罪障よ極楽水ハ名のミとして、この世からなる八寒地獄氷よ起りて水も
終る。因果の道理を今さへ悟るとう、嗚呼あづらしたる世の人ころも

感ひ情よ意見て生涯を終りの基は至て身を教ふも。と多うの人へ
とものん子どもらよ。又ある做ひ。母をのて。身の誡とそのくり。幼のひがこれ
とをのこ。続あろーしる寡鳥。鴛鴦の叙羽つをとゝ。非命ふ死るが寃魂の。
崇め釋て子どもらへ長閑き春よあのーあらんゞとるつしく。ひ深の愛こ
覚てる十二年。今青えらぶ名岩あふ。駅子へ過世の仇ありけん。難儀のふる
難ゞと。つくいふ物くら。只生憎よえり。落。涙を拭ふて臂近る。胡蝶の
小靴を掻とつ。吭のゆとうへ内ー。突とそんとぞーとりる。

第十五段

黒平を殺く綱五郎戰袍を復も
寃魂を鎮く拵櫻尼夫婦を分つ

阿總小糸へ泣叫びて母の右とう。左とう。慌忙推禁めゞ。こゝろ乱るふ事。
さるつく環会るぐらゞつまゞ下月の苦艱も。引受ざつをとら身をとうるつ。年来

慕ひあるゝせ。同胞ゞ又後ゝまで憂を慰むゝとゞいを。けのいをゝの
一周忌。六ゝ月つくも暇るれ。身のうれるふ分ひて一巻の経ゞも補せゞこへ
罪ふれるるゝ。とうち歎て侍るりの紙自害ーのふ母はふを際ーとゝく
入てやへあらん。懲も貴縁る物の怪を。法ゝ術とるるゝふゞ女見ゝとうふ代
らーと。死ーてゝと。同胞が涙とゝりよ諫ゞゞ。旦夕も共ゝよ泣流ゝ。阿總へ去年の
九月まで。養ゝの恩とうふ仕ふけゞといゝく病眼ふ閉られて。今叔の母を
見ゝとかるへゞ。小糸へ又六才の冬ゝより。仇の為ゝ。ゞ是ゞ終て養ゝの面。新
鶯ゞ。環會ゝと母も子も。形ひへ十二年。名岩あふ。ゝ夜の中ふ忍ゞ死母を喪ゞ
不ぬるゝらんとゝくゞも。形ゝ果も天の責懲禁めて孤ゝ辱を。累ゝ世へ
不孝ゝ。其外退ゝと。躬を反ゝて。妙ゝび死へとゝらしゝゝ。十五周秋七ヵ月を。
茶ゝう進乃ゞ。後ゝ引ゞどゞ。或へ利害を。疑ゝ。或へ経慮を。ゝ懲ーふ。小糸を

おふさ
狭七
小いと
岩藤屋ゝまうん

因を推―
果を説て
寃魂
得脱と
折櫻尼
つる五郎
十兵衛
あさけ
ころ平

握ぎりし巻とをそ〻推捧めて。刃をとゝんとする狂ふ。ろひ〻かけ〻箕子の下へ。ぐさと突出すと刀尖より。旦角八忽死太股かけて。小腹を刺さそ阿鼻叫喚。鮮血数と潰まべ。裂肉吐嗟。こうち驚紀。十兵衛八遠く。旦角を抱ひく退く。狂七八蒲團を刀尖へうち被てやく〻畳席薦を丁と反揚つ。傍の戸棚踏ひ〻れて。内なる刀を把るも寂く。栅掛る箕子の上へ。土まぞ徹底と突ぐもど。癖者八七や逃さりけん。猩猩とゞ〻ぜどとうんまべ右邊なる行縢へう。太平紀積抑兵衛八紬のごく。潜り出隙なる隻足をのゞ〻。呵と冷笑ひ。物共いく騒ぎなせそ。ゴまへ半晌黙平なり。小糸八えまワぶ賊物。狂七八姨の仇なれば。ゴまゑ彩一彼を奪ふて物よせぶやと云ひ〻べ。ゆる五月の夜の西。濃つ只管逃ひ〻ども。夏後まそ往方をたゞ〻遠憾〻ゴふ打。たゞ〻ぶもなる後ホ両人ぶ隠家のあとり近く。宿所を

求てまゝれるハ。今を潜る珠の鬼。今を寄ちぶ狂七を。彩一〻小手仇奪まとゝん。こそ箕子の下へ入る。狂ゴ四五人。法つ口張つ。奥ある口ちゴ耳ぶ。ろ〻ぶ。ぶ。ぶを稜一。狂七ぶ動静を考て。一刀ゴと。ろひ〻ゴ。刀尖拉ひく。後家奴を芋刺刃をやゝみとあゝれて。狂七八武士の果るゴ。裂ゆゝゝゴとあゝゆやせん。紫要のとゝゝ。と深念一〻。小鳥流さゝゝ。ゴまゴ。甲夜ゝ。紋ゝる二ッ玉逃ゝもいゝ。脱さべさ。祝念せゴ。と隻ゴホ繋ゴハ。間頸をさ一。刷ゝれ。狂七八さゝゝ十兵衛も。怒ゴ。ゴ塔ゴ。ゴ歯を切ゴ。ゝち倒ゝんと焦燥ゴも。鳥喘神機ホせんとゞゝ。席薦を揚て肩とゝつゝとも危ゝゝゝゝ。ゴ家ゝゝ。ゴ。笛の青をとゞめ。一五一十を竊ゝゝる。虚無僧八遠ゝ。天蓋をゝゝ。ゝ。接門の戸さゝゝと推開ゝ。飛ゝるのゞゝ。跳入ゝ。尺八の笛ゝ。揚て。今ゝゝ火蓋を拔ゝんとせ一。半晌ゝ鳥銃を只一打ゴ打ゝ。ゝ。黒平ゝゝ驚ゝ。両三あけ

擁て頸を叩落とんて。翻筋斗うたせもあへず。綱五郎は[illegible]抜捨て閃りと引抜く懐剣の光りとともに黒平が頸へ地上に礙と墮軀も共に仆れけり。十兵衛狭七は兎もかくも。危窮を救ひし綱五郎が。去ても甚だしき打扮に或は訝り或は歓びて。まづその恙なきを祝して日来のうたがひ氷解るに。綱五郎は斜にあるべき。黒平が軀を跳返して。上着る衣を切解けば。下にかくせし一文字の陣羽織を引出して。猪七がわたりに闘ひし重罪を犯しながら。容を変て面を匿し。此段に潜まりし絶て本意にあらねども。和殿と誓ひし言を食ず。黒平が所在を索ねて。この陣羽織を取んとてこそけふまでは存命たれ。去るに和殿は巨六が扶助を得て小糸とともにこの処に覊るよしを陰に聞て知りとなく思ふまゝ。徘徊ひつゝ待とて。竊に猶来して。姨尼阿総小糸が寄身の再会懺悔の述首より。尾まで竊聞して。いとも哀に思へども。己れも早宿

刀祢。年来の丹精は。実の叔母にまします恩愛。そが央でも養ひかへさず。なれば非命に括をかゝるゝ。阿総小糸が哀傷を。見ひさぞかしと痛しとりけば早宿を月をひいれ。うちらんとするのを[illegible]。阿総小糸へ[illegible]よう。残る母まもり著て法流ろ。黒白を別ぞ綱五郎は此彼をつくしとかんて歎息し。人の齢は五十年。後るゝも先ざるも一瞬の中なりけり。是より八王寺なる扇谷殿へ推参して。潔く罪に死ん。狭七。和殿は陣羽織を。縁金へ齎して忠義を全すべし。是今生の別よとて。告別して出んとする折。狭七十兵衛左右より推禁めんとする程に。振放ちて走り出る門口に。捕手の兵士三四人。脱さじと聞さる。背後に響く鏑矢に。個の兵士背より胸まで射徹され。その矢あまりて又一人。おなじく仆れ了ぬ。残る二人は大きに驚き。嗹を閉し逃んとするに矢を射かくる。恁る程に。みな悉く射仆さる。綱五郎はこの光景に疑ひ惑ひてなほ進まず。

早く時蹟をどこそあん。巨六幡丁の喘く走り来つ。綱五郎を見て声を細くし。
某等同朱より。大哥の往方を索ねるふとて逢へこそ幸ひなれ。誰とか
ちふ孫ど。武者鬱此方を向て移り来る様。さて今途をそんとするのり。由断
なのよるのと密蔵べ。綱五郎うち点頭さもあらば。彼れへ参るふなづさ。去の外
まで罪を侯んざるふてもつぐ為ぬ。この兵士等狂射殺して。亦復罪を倍せ。
いつの人よあんどらん。ごろ引ぐ。と呼びつ。巨六幡丁を門まで残しく。
後て裡面へぞ入りまる。當下狩七の綱五郎が立ぬ見るをうんてふく飲べ。
王孝の途ひと遥。賢兄彼れへ赴くを追ざしかとまでや死んとちべるり。
絳ふるまよるれ扶助ふるて。一文字の羽織を引るんが。些と後ぞとといべど。
曩よ主君の懸想しのふ。小糸を教さで伴ふる。後悔てよたちぐと已るん
已るん。とりひも果ど。背掛よのりつる。憲政の矢ぐ紙ぞ出で。一枚の紙て

写せ。又母の戒名を綴よ巻そえ腹へ突立んとまる程よ。良人の傷ぞ伏流る。
小糸い高く泣叫びて。携ぞ出て方ぬく。掻半ばて転撮綱五郎十兵衛
等ぬ。その間遠くして。推葉るふ遑ぬ。既ふかうとえんるれいつの行ふ
潜び入りけん。歌比丘尼滅多ぬ。法衣微妙く整て。餓鬼骨の障子さと閉れ。
水晶の念珠をもて。狩七を丁と打しぐ。狩七が忽地脱離て。鍬を戻哩と
高つ。驚ぬ呑ふ眼を瞪し。何人るるらんと思ひしよ。紙型の歌比丘尼。
誠とるる。と叱されば。滅多ぬ珠数をふり揚て。又丁ことちち懲ぬ。迷ふる邪
神系狩五郎。好きの肉眼りて。いつで方すの阿彌陀を紛べき。抑尼を伝ふ
んとる。名告べ。吾偏ぬ則和殿の母。神系矢所平仲の妻ぬ。
とりよ狩七ぬ。ぐ研て。頭ぬ聽れば。袖ぬ和殿を産るその年ぬ。
世ぬ病死と被ぬ。て。鎌倉死逐電し。世ぬ黒髪とりぬ世よ。剃捨て尼ぬ。

折櫻と法号して。紀の加田浦に葬るべし。其外に菴を結べる比。有一夜の夢に異人に値遇して。忽地に悟道して。人の吉凶禍福を推さるゝ達人なり。原この尼が良人に別れ子を捨て出家したるは。亡夫の先君憲廣朝臣。何処にか幽霊ありけん。吾倚に懸想して。たびく艶書をおくりぬ。こゝかの君の不幸は責ぐべし。されどこの道ある。仰ぎ従ひ難し。進退こゝに究りて。あるべきを良人に告げ。則頓死と披露して。飽ぬ別れを所天の為。主君のために為子の為。不慮の出家も物怪の徴祥。恩愛の羈を断てこそ。倩べしや十九年。世にあるべきに安らかでそれにかはらで。不和殿が自教の根柢を推さるゝ。主君の懸想して。小糸を教へて禍を截断んとこゝろ。却小糸を教へ多どこの女子を誘引て。逆電してこゝもみるこれ因果。既に先君憲廣朝臣一旦の惑ひなく。

矢所平ぬ。こは家愛の妻を棄さるべし。亦是當主憲政朝臣に下さび懸想して。小糸を奪れるひぬめれば是貴に賤さおそれても。なほおそれ。警てもなほ誡め。慎むべきは好色なり。さりとても。只管因果の道理に泥て。みづから行きいよく不義なり。夫賞罰は君より出。縦令乃非を知といへども。罪を君に問ぶべし。いかゞ死んと思ふ。甚しく惑ひなるぞや。この由多に打擲して。且く自教を禁じ。つゝく母が私なるべしと。いふに狭七は驚嘆して。坐に涙をながす。拆櫻は又衆人にうち対ひ尼が紀の浦に在て比教化して。木嬰比丘尼は。綱五郎が母にて。一人に去るといへども。つゐだりも過失なく。いと貞実の婦人なれば。神仏彼が不幸を憐て。父一八に逆ふまじ。その子は母の徳を承り。又この旦岡は路上の残花。その非を責て足らず。孫ども。罪なきに。自教を以ぞ悪根に傷らる。寂期乃

懺悔を可。女児ふたりが患難流浪を。人の妓を奪ひとる。東六郎が不
義より生せり。且小糸も既に罪あり。背棋を恩義として。養れる母をば。
狭七が姉小縁ありとも。背棋が骸をも飲ず。狭七とても小糸をひとりの
道ならべし。又十兵衛が妹豆腐が舊悪を匿して。八が身をも十く他が妻と
せしこと甚しく。過失なれども。年来の孤忠として。許すべし。
抑神原五十四郎が豊嶋左衛門が子孫なり。むし〳〵老後が死せしこと。
雅き子ども三人あり。長男二男は擒となりつ。後に尚の管領に仕へて。
神原五十四郎とぞ召れる。狭七阿徳小糸ハ。たゞ三世の孫なりなれば。
豊嶋が李子なり。市人なるゆゑ〳〵。とい綱五郎が先祖なり。この因縁を推も
て。阿徳ハ一旦狭五郎と婚縁を結ばんとすれども。こゝ出物なる小蒲も扇もかの
舊よりとしくば。夫婦の縁いとゝ絶ん。今改て阿徳をもて。綱五郎を

妻せるべ。昔加茂の川邊にて。東六郎が曙明を奪れしこと八が。外にも
こゝに教ふべく。罪を改めて贖ふべし。尼ハ武義へ赴て比丘。徳を包こ
光を埋こ。愚夫愚婦を組教して。人間を快楽。世の形容を側〳〵く。
こゝ汝達がる限ありて。こゝをもて。扇谷の股肱の臣岩藤尾乃右衛門と
商量。両管領とこゝのゝ限。こゝ中ゆえあげくること。又一文字の陣羽織を。
原建長寺の什宝なれども。いとも高価なれば。加持して阿徳が眼病を治し
得させんとぞ。説示し。念佛十遍だに唱る程に。弄るゆゑ彼羽織を。
光明教奕として。阿徳が面を照すとぞ。病眼も快よ癒りて。物をうることゝ
ぞ。時に屋の棟に青楽鳴て。覓魂を得解。豆腐が寂期の苦悩を
ちくぶ。睡る隨に息絶しぬ。阿徳小糸ハ又更に。声を合して泣ふけり
浩処に岩藤尾乃右衛門ハ。南蛮猴の腹巻に十王形の臑當して。弓勢を

憲政一文字の
獄地を
獲て途よ
勅賞を行ん
のう改
長尾氏書
岩藤毛乃右門

十兵衛
狭七
小いと
ちふさ
つる五郎
ろう手首級

は狭を駆兵を招て。徐々と裡面に入り。綱五郎が為ふうちに対ひ。互に談ず。
両管領の命を受山賊伍平太を捕んとす。獣猟師が打扮て水右衛門と名
告る。且くこのかたうふあり。さるほうの。甲夜よりたちまち汝達が支の為体を窺
竺。且綱五郎が為ふ対ひの兵士ホを射て殺ぬ。ちまたどや件の兵士等を
山魅ぶ残党なり。名を管領の対ひふ端く。怨紙送さんとするのこされば
いあるる日圓塚ホて。綱五郎ま殺されいる。狭七を追捕の兵士も。伍平太が支
黨の小賊ホでありるよ。いあるる夜阿隅田河のほとりホて。綱五郎
偷児ホが首伏ホよりて三度衣を。又黒平微八ホい。積悪の癖者なれば。
三度衣殺して。ほうく功あり。武士も及ざる跳梁九天晴ざるほと扇を開きて。
あるが立る鮮暁の風ホ。雲井の月も代るも。列を乱さぬ人馬の足音こそ。
ある大将ぞ。但見べ管領憲政朝臣。此度鎌倉を進発。上野平井へ城の

利装路の程さく折もよく。この知をぞ。ひとりのホ。巨六幡丁逸ホんて。綱五郎
等ホ告ーんべ。貪遠ーく出迎。檐外ホつのおそ侯をれば。長尾景春金釋
ーて。狭五郎綱五郎ホよりて対ひ近曽主君帰城の詳ホ。吾儕鎌倉へ
百里ーんべ。獲て平井を起程。いある五日の暁方ホ忍の岡をるつ。伍平太
微八を聚とりて。綱五郎が為体を。ちんてーんべ。後日の為ず
悪視ホぶ。脱捨る戎衣を。従者ことを及ぶし。途いそぐ。ほく行る。扇
谷の家臣さる。岩藤生ホ遣て。ゆくるのあるて。綱五郎が志の厚ぶる紙
感佩ー。且狭五郎がるのさ。ゆくゆくる越を。主君ま。ゆえあげーるとのホ
狭七ハ恭ーく。綱五郎のるる共ま。一文字の陣羽織を。景春ホ遍与て。綱五郎が
勇敢信義の返を演説ー。暴ホ背撰ぶ。ほうつーる。主君の名字ぞ記されー。
捕者を返ーるあふさんべ。憲政馬上ホ感ぶ。神原狭五郎。馬の外ホ。汝が

孤忠の趣を。景春が[illegible]とをありて[illegible]且り。但し小糸を携へて。その夜逐電
[illegible]の。淫奔の咎ありとのべども。その過失を予より生ぜり。且細五郎が
異母[illegible]て。一文字の陣羽織を索ねられんば。[illegible]物ら私の恩賞ハ
諸士を奬さるゝ妨あり。且道徳殊勝のゆえあり。析採禪尼が謹て[illegible]
敢あり。況りて。没ふ小糸をとゞまるゝ。[illegible]田の不町へ退隠て十年[illegible]と
相[illegible]。[illegible]を相続せよ。又[illegible]九細五郎ハ豊島が赤子の後[illegible]
かれば。神原五十四塚ホと同宗なり。彼ハ民間ふ人なれども。武[illegible]勇敢ハ先
祖ふ劣ざ。単身ホて圓塚なり。山賊伍平太ホを討平げ。悪棍黒平微ハを
剿ーく。挾五郎が為ふ一文字の陣羽織をとり復せ。公私の大功[illegible]及ん。
今[illegible]予ふ仕へ。五十四塚神原の両家を相続せよ。本領を安堵
さ[illegible]ざ。又彼東六郎が長女[illegible]と[illegible]ん。孝烈愛さる女子なり。[illegible]ば挾五郎

と。婚縁を締といへども。[illegible]ざ下[illegible]びも枕席をさゝのごとゝ[illegible]。よ[illegible]
析採尼の教を仕へ。[illegible]且[illegible]細五郎ふ妻[illegible]べ。と懇切ふ仰を[illegible]び長尾
景春うけ[illegible]て。大小の腰刀と一襲の衣裳をとり出て。析採尼[illegible]
細五郎ふ賜ふ。阿總小糸ホ推辞ざ[illegible]しつ。君臣
夫婦合體て。[illegible]めで[illegible]ざ栄る。宮ふ夫婦のえふ[illegible]だり。智力をりて
測るとも。量知ざ[illegible]りのへ[illegible]。當初矢所平が聘物とて。その子乃
為ふ。阿總ふ[illegible]り。刀子又。小鞘ふ金の胡蝶あり。且その日阿總が漫ふ筆を
[illegible]て。挾五郎ふ[illegible]扇を。[illegible]貝を[illegible]方ふ[illegible]。これ[illegible]て彼をとらべ。
この婚縁とのへざ。小鞘の胡蝶を名ホ[illegible]。[illegible]九が妻となるべ。その[illegible]
旦明が三ふ析[illegible]。[illegible]を蒔絵の印[illegible]ふ。[illegible]ハ細五郎妹ふ[illegible]乃
さて貝ホ。名[illegible]自性[illegible]。析採禪尼の媒[illegible]。結び[illegible]

綱五郎が絲小糸へ接ふる。接七を婚ふ亦兒孝縁彼よりそれて
此ふあふ小蝶の小鞠ふ探見の歌の恋春まち弱る。俠客節婦の妻の姉。この
趣ふへ異るれども。我太夫曲とちがふのまゝ。やうに作るとなん。

玄同陳人拙して道。虞舜の聖ふあぐうせべ。堯の二女を取て妻とするを
よしとせんや。接五郎ふへ況て小糸と夫婦ふなるとは。又その姉を娶ふ
由なし。彼ふこの落命の女子を憐ざるんや。くる方よ月老氷人更ふ良縁を結
して。綱五郎が妻とあるとのへ。父母の因果をあらのこるるべ。おのくその身乃
徳ふるもう。人ふんべ。天物一部の小説。その人物を論ずれば。綱五郎と阿絲の。其
紛状ふ洗現るゝのゝ。ひとしく是賞とべ。豆癡情と逍遥風と作ふ。媚を
婦幼ふ与ふ為ふらんや。俠者の用ふ与ふあり。俠者の用ふ与ふあり。

絲櫻春蝶奇縁巻之十大尾

東都書肆中金堂藏板書目

椿説弓張月　五編揃三十巻　曲亭馬琴作　前北齋画
夢想兵衛胡蝶物語　前後九巻　全　歌川豊廣画
隅田川梅柳新書　六巻　全　前北齋画
稚枝鳩　五巻　全　歌川豊國画
勸善常世物語　五巻　全　溪齋英泉画
曲亭水滸傳　五編揃九五巻　全　歌川國安画

優暈華物語　八巻　山東京傳作　可菴武清画

金鈴橘草紙　全五巻　古實物語　全六巻

旬殿實實記　三編揃　十五巻　曲亭馬琴作　歌川豊廣画

絲櫻春蝶奇縁　前後　十巻　全　全作　画

皿皿郷談　八巻　全　前北齋　画

右旬殿實々記以下の三部は先年祝融の災火に罹て灰燼となりぬ。版木灰燼となりぬ。于今十有餘年に彼公羽丹誠の筆頭微妙の巧ありて古今に傑出せるものなれば看まく欲する人年々少しとせず這回尚校正を加へ再刻梨棗近きにあらん。四方の看官唐鬻の日を待て需めんことを願ふのみ。　板元　中金堂欽白

頼豪阿闍梨怪鼠傳　前後　十巻　曲亭馬琴作　葛飾北齋画

四天王剿盗異録　前後　十巻　曲亭馬琴作　歌川豊國画

うとふ安方忠義傳　前後　八巻　山東京傳作　歌川豊國画

繪本浅間ヶ嶽　前後　九巻　柳亭種彦作　蘭齋北嵩画

霜夜乃星　全五巻　柳亭種彦作　葛飾北齋画

右之外諸家隨筆物語ならびに和漢の軍記実録なるひとし上代物語乃至ゑ何ぞ枚挙に暇なし

東都書肆　中金堂　両國米澤町三丁目　釜屋又兵衛板

相馬自記　全四冊　高田與清稿　北條時鄰注

其文雅ありて觀るに見離せば珍奇妙談実に法書廊の冠たるものなり

新著聞集　全八冊

橘菴漫筆　前編四冊　後編四冊　田仲宣述

三養雜記　全四冊　山崎美成著

京襍乃記　全三冊　曲亭馬琴作

東都書肆　西國米澤町三丁目　金屋又兵衛板